

耳であるくレディング生活 — 音声の多様性、L2、大学 —

小松 雅彦

2016年4月から在外研究の機会をいただき、イギリスのロンドン近郊のレディングという大きな町に滞在している。最初に実感したのは、英語の発音の多様性である。イギリスは地域方言・社会方言とも多様であるということは教科書で知っていたが、実体験してみると想像以上である。レディングでは、まるで会う人ごとに違った発音をするような印象である。なぜこんなに違う発音どうしでお互に通じているのか不思議である。皆色々な発音を聞き取るのに慣れていたのであろうか、私の発音する英語はすんなり理解してもらえ、相手の言うことはさっぱり分からないことが多い。しかも、聞き返してもゆっくり言ってくれないし、言い換えてもくれない。ここまで多様な発音が通用しているとなると、日本の英語教育において発音の教育をどうするか考えないといけない。また、レディングを離れてみると、地域によって独特の声質を使っているのではないかと思われることがあった。

レディングには、多様な出自の人たちが住んでいる。ちょうどレディング大学の学部生の研究 *Superdiversity and the linguistic landscape of Reading* (B. Jupe, 2016) が、学内の賞を取った。それによるとレディング中心部の看板や掲示で23言語の使用が確認されたらしい。私の体験だ



ネス湖 (スコットランド) にてネッシーと

と、バスに乗っていると何語だか分からないが同時に色々な言語が聞こえてくることがある。レディングの街を見ていると色々な民族の人がいて、なんとなく、幼児用の絵本の世界を彷彿させる。森に色々な動物がいて仲良く暮らしているが、家族や連れ立っているのは同じ種類の動物が多い。

その他に、発音で気が付いたのは、Thank youの発音である。私の耳には「サンキュ」でなく「サンキ」に聞こえる発音 ([ˈθæŋk jɪ]) をする人が特に若い人に多い。これは、GOOSE fronting と呼ばれる現象で、ここ半世紀くらいで[u]が中舌化しさらに円唇性を失ってきている。

4歳の娘のSawaがSarah先生に音楽を習っていて、そこで気付いたのだが、イギリス人の幼児がSarahと言うと、私の耳には「サワ」と聞こえてしまう。英語の/r/は円唇性があり、幼児はまだ舌の動きが不十分なので、そう聞こえてしまうの

だろう。英語の /r/ の円唇性を改めて実感した。そう言えば、娘は water を「ポーチャ」「ポータ」と言うが、これは /w/ の円唇性が強いからだろう。

我が家で一番濃厚にイギリス人と接しているのは、その4歳の娘だろう。迂闊なことに当地に来るまで知らなかったのだが、イギリスでは5歳になる前の9月に小学校に入学する。小学校と言っても0年生だが。英語が全く分からないまま5月から幼稚園に行き始め、幼稚園の夏休みに保育園に行き、9月から小学生になった。慌ただしいことこの上ない。さて、子供はすぐに外国語を覚えると言うが、大人の場合と同じでかなり個人差や状況による差があるのではないだろうか。実は、イギリスに来た当初、急速に日本語が発達し、複文を使って因果関係などを説明するようになった。一方で、英語は、時々、プロソディを真似て無意味な文を発することがあるくらいであった。第二言語獲得でこのような喃語後期のような段階が現れたのには驚いた。詳しくは分析していないが、2子音連続までは出現していたが3子音連続は出現していなかったように思う。しかし、なかなか英語は話さない。5月末頃には、本人が「英語を話したら日本語を忘れるから話したくない」と言ったのである。幼児侮るなかれ。自分ははず

れ日本に帰るということを分かっている、それなりに考えている訳である。半年ほどして、小学校入学後、かなり英語が理解できるようになり、自信もつけ、11月初めから、突然、英語を話すようになった。最初は、単語というよりも、日常よく使われそうなごく短い英文である。それから急速に産出する語彙も増えていき、12月には英語と日本語のちゃんぽんで話すようになった。日本語の語彙はやや忘れており、例えば、英語で数を数えられるようになったが、日本語では数えられなくなってしまった。一言で幼児と言っても月齢によって言語の発達段階は異なる。4歳だと、かなり複雑なことを話し始めている訳で、子供同士のコミュニケーションにおいても言語に依存する部分が大きいのと思われる。そうすると、突然その中に入っていくのはハードルが高いのではないかな。もう少し幼いと、周りも単語だけとか簡単な文しか話していないので、入っていきやすかったのかもしれないと思う。

さて、レディング大学は、学生数は神大と同じ規模だが、神大と比べて非常に広々としている。神大の横浜キャンパスが0.1km²なのに対し、レディング大学のメインキャンパスは1.3km²で湖や森もある。キャンパス内に保育園もあり、娘も



レディング大学。湖には野鳥がいる



レディング大学キャンパス中心部。左が人文社会科学棟、右が図書館

短期間だが通った。

イギリスの大学は、学部が3年、修士が1年と短い。私の居る Department of English Language and Applied Linguistics は、学部生は1学年だいたい50名前後だが、30数名のこともあれば60数名ということもあるそうである。修士は通学生が20数名で、通信生が同数、博士は20数名だそうである。教員はフルタイム10名にパートタイム3名で、ほぼすべての授業をこのスタッフで担当している。学生数1学年200名×4学年、専任教員14名で、約60%の授業を非常勤に依存している神大英文学科とは大きな違いである。人により異なるが、各教員の担当授業数は年間で4個程度(神大は半期で学部5個以上)、論文指導は学部・大学院合わせて10数名だそうである。最近の大学の英語学強化の方針で、ST比は35から20へ、担当授業数は7から4へ下がったのだそうである。事務職員も学科にフルタイムが3名いる。学生の方とは言う、学部生は週に6コマ授業を受ける。これも随分と日本の大学とは異なる。ここまで違っていると、神大とはそもそのシステムが違うと言わざるを得ない。ただ、こちらでも、校務の負担は多く、また年々増えているそうである。

レディング大学の Department of English Language and Applied Linguistics は、TESOLで有

名で、世界中から学生が集まってきている。J. Setter教授の修士課程の音韻論の授業を聴講したのだが、教職のために基本的な事柄を厳選して教えるという感じである。学部で関連した分野を学んでいない者も受け入れているという事情もあるのかもしれない。その代わり、授業時間の半分ほどは音声記号を使ったディクテーションのトレーニングに費やされる。神大大学院でも英語の教職志望者が多いので、シラバスの参考になる。

ところで、肝心の私の研究の方とは言う、幼児向けアニメを見て音声学の授業で使えないかと考えたりしている程度である。

紙幅の都合で、おもに音声学に関わる事柄だけ記させていただいたが、もちろん外国に暮らすと色々ある。私の前回の外国暮らしはちょうど20年前、カナダ。前回と比べて今回は何かしら大変で、何が違うのかと考えるに、単身と家族連れの違いか、加齢による衰えか、それともやはりイギリスが大変なのか。在外研究の研究課題は音声学だが、むしろイギリス文化入門の実習をしているようである。しかし何となく今ここで生活できているのは、多くの方の支えあってのことである。名前を挙げようとする膨大な紙幅が必要になってしまうので割愛させていただくが、皆様方に厚く御礼申し上げます。

エンは異なるもの—俺のことかとソクルマ言い

小馬 徹

はじめに

1957年3月6日、英国領黄金海岸は黒人アフリカ最初の独立国ガーナとなる。同地の植民地化の契機となった初の条約（「1844年条約」）が英国政府と「部族長」たちの間で締結されたのが、実は同月同日だった。つまりガーナ独立の期日は、植民地の時間を象徴的に巻き戻して、アフリカ諸国独立の原点とするべく構想されたと言える。

翌1958年4月、ガーナ初代首相（1960年には大統領）ソクルマが第1回アフリカ独立諸国（8カ国）会議を同国の首都アクラで開き、「アフリカの年」と呼ばれる1960年には17もの地域が一斉に独立を果たす。アフリカ諸国の独立は更にまだまだ続いて、1965年には合計36カ国に達した。

このように、まさにアフリカ現代史の分水嶺となるガーナ独立の当日に、アフリカ解放運動の旗手を自認するソクルマは、*Ghana: The Autobiography of Kwame Nkruma*, London: Thomas Nelson and Sons Ltd.（K・エンクルマ『わが祖国への自伝』〔野間寛二郎訳〕理論社、1960年12月）を世に問うたのだった。

同書の本文は、「私の誕生について、ただ一つ確かだと思われるのは、私がエンジマのエンフル村に、九月なかばのある土曜日の昼ごろ生まれたということだけである」（The only certain facts about my birth appear to be that I was born in the village of Nkroful in Nzima around mid-day on a Saturday in mid-September.）という、短いが誠に印象深い段落から書き起こされている。小稿は、自他共に認めたパンアフリカニズムの旗手、ソク

ルマの日本語名表記が、一体なぜエンクルマなのかを巡る、些かの由無し言である。

一、「アフリカの年」と「アフリカ報道元年」

多くのアフリカ研究者が、上の素朴な疑問を長年胸底に潜めてきた。幸い、直接の当事者がその経緯を開陳する機会が先頃用意された。日本アフリカ学会第50回学術大会の公開記念講演「アフリカ研究の誕生」（2013年5月、東京大学）がそれで、演者の一人、元朝日新聞記者の奥野保男が当時のアフリカ報道の実情を率直に回顧しつつ、今も胸に蟠り続けている「エンクルマ問題」への屈折した思いを吐露したのだ。本節に、まずその報告の要点を簡潔に記す。

「アフリカの年」1960年の第15回国連総会は「アフリカ総会」と称され、同年が日本にとっての「アフリカ報道元年」ともなった。それ迄、アフリカ諸国の個々別々の問題の取材は、各社ともロンドンやパリ等、欧州駐在の記者を短期間派遣して凌いでいたが、抜本的な変革が迫られる。

同年9月、朝日新聞が真先にアフリカ40カ国・地域を回る「移動特派員」（roving correspondent）の設置を決め、奥野がそれに任じられた。だが、実際の出発は翌1961年3月、アフリカ到着は同年4月になる。アフリカの駐日公館は、当時アラブ連合、エチオピア、ガーナの3大使館、一方駐アフリカ日本大使館はその3国、並びにナイジェリアと（レオポルドビル・）コンゴの5ヶ国に過ぎず、入国ヴィザの取得やホテルの手配等が困難を極めた。そんな実情から、結局、奥野は当初の

アフリカ滞在予定2年間に1年間に縮めて帰国することにもなった。

当時の日本メディアは現地経験も正確な知識も乏しく、アフリカ報道にはごく初歩的な過誤が多かったと言う。奥野には「人名や地名の表記が分からないことは最大の問題で」、「ガーナの初代大統領ははじめヌクルマだったのがエンクルマに変わったのは『n』の誤読であった。これは私の友人と私の責任であるが、日本語にない『ン』をどうすればいいのだろう」（同学術大会『研究発表要旨集』）と、今も続く煩悶を隠さない。

その昵懇の友人とは、アフリカ事情通を自負した国会図書館専門調査員西野照太郎であり、奥野が西野の諫言を容れて朝日新聞に「ヌ」を「エン」に改めさせた旨、奥野は口頭で補足した。

二、「ヌ」から「エン」への変更の背景

では、「ヌ」から「エン」への変更は何時の事なのか。西野は、自著『鎖を断つアフリカ』（岩波新書、1954年）では「ヌクルマ」、『アフリカ読本』（時事通信社、1960年9月）では「エンクルマ」と表記している。この簡便な検討だけでも、それが奥野の旅立ち以前だと分かる — 『わが祖国への自伝』も西野や朝日新聞の表記に倣ったか。だが、奥野はガーナの地を踏んで、いずれも実際の発音と全く違うと即刻悟っただろう。爾来長く尾を引く苦衷と自戒の念が、「日本語にない『ン』をどうすればいいのだろう」の一節に色濃く滲む。

私には、それでもなお重大な疑問が残った。すなわち、Nkruma の語頭の子音前鼻音「n」が最初「ヌ」と表記され、次いで「エン」に変更された論理が依然不明のままなのだ。想像を逞しくすれば、「ヌ」としたのは、日本語は、①音節の基本構造が開音節で、②「ン」が語頭に来ず、さら



ランドクルーザーで調査中の光景。ロバでトウモロコシを市場に運ぶオバサンたちと（ケニア）

に③「n + 母音」（つまり、ナ行）の内では「ヌ」が最も「n」に近い、という判断によるのだろう。

他方、西野がそれを「エン」に変えた論理は容易に測り難い。ただ、国会図書館勤務の彼が英語版百科事典類でNkruma の発音情報を得た可能性がありそうだ。アムハラ語やアラビア語を例外として、アフリカのほとんどの言語がアルファベット表記の正書法を採る。だから、英語ではNkruma をそのまま文字表記できる。他方、発音情報は完全に捨象されることになる。

英語には、「子音前鼻音」で始まる語が全く存在していない。そこで、Nkruma の名前の最初に来る子音前鼻音「n」を英語でどう発音するべきかは、厄介な課題となる。*Encyclopaedia Britannica* は発音を示さない。一方、*The Encyclopedia Americana* は [ən-krōō' mæ]、*Academic American Encyclipedia* は [uhn-kroo-'mah] と、発音を特定する。だが、前者を採ればアンクルマ、後者ならウクルマの表記の方がむしろエンクルマよりも適切だろう。

根拠を他に求めれば、西野が当時英語のニュース映画を見ていた可能性が想定できそうだ。管見の限り、英米人の発音は、ニュース映画では皆エ

ンクルマと聞こえる。英語に堪能でもアフリカ滞在経験が全くない西野は、英米人のニュース映画での音声に接して俄かに蒙を啓かれる思いをし、我が意を得た。そして、安んじてその権威に追従したのではなかったか。

三、アフリカの言語と「子音前鼻音」

アフリカ現代史の要石である ンクルマがエンクルマと誤記された実害は、決して小さくなかった。仮にもアフリカ人であれば、それがNkruma だとはまず気付くまい。そこで、今ではアフリカ語の語頭の「子音前鼻音」を「エン」とせず、音としては大胆に省略する表記さえも見られる。例えば、ノーベル文学賞候補に長く擬されてきたケニアの高名な小説家Ngugi (wa Thiong'o) を、アフリカ文学研究の泰斗である宮本正興は、あっさりグギと表記する。その方が、エングキよりも遙かに実際の発音に近く、アフリカ人にも通じ易い。グギという音を聞けば、アフリカ人にも、それがNgugiの日本語的な発音だとたやすく類推できる

と、私も自信をもって言えるのである。

アフリカには、「子音前鼻音」で始まる単語が例外的ではない言語が、決して少なくない。幸い、この事実の間接的な証明に援用可能な、手ごろな資料がある。即ち、『言語学大辞典』第2巻〔世界言語篇(中)〕(三省堂、1989年)が項目化した、「ン」で始まる世界中の諸言語名(1147～1193頁)がそれだ。その言語名自体がどれも、「子音前鼻音」で始まる単語をその言語が少くとも一つは持っている証拠となるのだから。そして、実にそのほとんどがアフリカの言語なのである。

なおここで、アフリカの1,825言語が、先ず①ニジェール・コンゴ語族(1,302言語)、②ナイル・サハラ語族(109言語)、③アフロ・アジア語族(275言語)、④コイサン語族(141言語)に大きく分類されることを紹介しておかなければならない。

さて、『言語学大辞典』で立項された「ン」で始まる名称の104言語は、①ニジェール・コンゴ語族93、②ナイル・サハラ語族2、③アフロ・アジア語族2で、アフリカ以外の言語は僅かに7



アフリカ大断層溪谷を見晴らす。日本人の知らないアフリカの自然と言語・文化・社会に教えられることは数多い。(筆者撮影)

言語（オーストロネシア語族3、オーストラリア先住民語1、南米インディアン諸語3）に過ぎない。なお、当該のニジェール・コンゴ語族93言語の内訳は、E.ベヌエ・コンゴ語派53、F.アダマワ・ウバンギ語派33、A.大西洋語派3、D.クワ語派3、B.マンデ語派1となる。さらにE.ベヌエ・コンゴ語派の53言語の内訳は、狭義のバントゥ諸語24、広義のバントゥ諸語25、クロスリバー諸語2、プラトー諸語1、ベヌエ諸語1である。

このように纏めると、「子音前鼻音」で始まる単語の日本語表記は、アフリカの言語の小さな領域の問題だと思われ兼ねないが、実はそうではないのである。付図（『言語学大辞典』第1巻、1988年、245頁）を参照すれば、ニジェール・コンゴ語族①がアフリカ大陸のほぼ南半分に当り、且つアフリカ大陸南部でも最も自然環境に恵まれて生産性が高く、人口も稠密な地域に、実に広く分布していることが分かるだろう。

さらに、以上の作業は、仮りに「子音前鼻音」で始まる言語名の存在を手掛かりとして、「子音前鼻音」で始まる語がアフリカの諸言語の重要な特徴の一つである事実を例証したに過ぎない。

実際には、言語名や言語系統の如何を問わず、アフリカの多くの言語で「子音前鼻音」で始まる単語は、実にありふれたものなのである。長年私が人類学の参与観察調査の対象としてきた、ケニアのカレンジン民族の言語（②ナイル・サハラ語族）もその一例である。因みに、私の調査拠点のマーケットの地名は、ソダナイ（Ndanai）と言う。

四、語頭の「n」のキメラ化と先祖返り

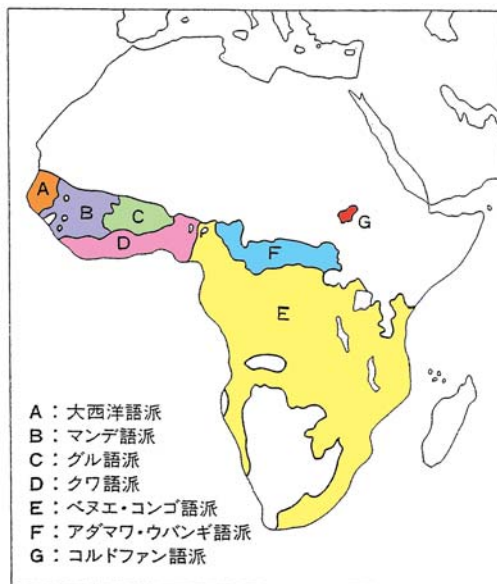
恐らくは奥野の帰国報告が震源となったのであろう、その後、語頭の「n」の日本語表記に変化が生じた。例えば、『世界伝記大事典2〈世界篇〉』

（ほるぶ社、1980年）は「エンクルマ」の項（388-391頁）で、彼が「ヌジマという小部族に生まれた」としている。『わが祖国への自伝』では「エン」と表記されたNzimaの「n」が「ヌ」に置き代わっているのが分かるだろう。なお同事典は、「エンクルマ」の項の前後に、ケニア独立前後の政治家「エンガラ」（Ngala）とドイツの統計学者「エンゲル」（Engel）を配している。

つまり、語頭の「n」が西野の諫言以前の表記「ヌ」に祖先返りしたのである。ただし、「エンガラ」（Ngala）に見るように、アフリカ人の名前に限って、語頭の「n」は「エン」でなおも押し通す原則が並存している。それは、①広く定着してしまったNkrumaの表記エンクルマの改訂が厄介だから、②他のアフリカ人名も「エン-」で押し通すという、いわば「糞土の牆を塗る」にも等しい姑息で退嬰的な対策だった。

実害は益々大きくなってしまい、宮本正興のよ

ニジェール・コンゴ語族の分布



出典：グリーンバーグ (Greenberg, 1963) [『言語学大辞典』第1巻、1988年、245頁]を基に作製

うにNgugiを「グギ」と表記する必要性が痛感されたのである。他方、私自身は1970年代からNdanaiを「ンダナイ」と表記する方式を採ってきた。カレンジン語では、「子音前鼻音」が音素として明確に対立をなすからである。「糞土の牆を塗る」彌縫策は、こうして「n」のキメラ化というさらに複雑な困難を招く結果になったのだ。

ここで、実害の別の面に少しだけ触れてみよう。ソクルマの母語はソズィマ(Nzima)語、またはソゼマ(Nzema)語と呼ばれ、ニジェール・コンゴ語族(①)のクワ語派(D)に属し、ガーナとコートジボワールの国境の東西に分布する。その24の子音の内4つが、鼻音(n, m, ŋ, ɲ)である。名詞の複数形は一般に接頭辞N-またはa-を単数形の語幹に付けて作るが、単数形の語頭が母音の場合はその母音を取ったうえでN-を付ける——さらに語幹語頭の子音も変化するが、説明は割愛する。例えば、*duku*(頭巾)の複数形は*nnuku*となる(『言語学大辞典』第2巻、1168-1171頁)。もし、これをエンヌクと表記すれば、「母音を取って複数化」するソズィマ語の文法を無視し、且つ無知のゆえに単数風の語形に逆戻りさせてしまうという、二重に背信的な操作になるだろう。一方、「ヌ」方式なら、「ヌヌク」と表記する愚を免れない。

前項で示したように、「子音前鼻音」で始まる名称を持つアフロ・アジア語(③)は、2言語に過ぎない。だが、アフロ・アジア語では、名詞に限らず「子音前鼻音」が語頭に來ることが、様々な言語現象で見られる。例えば、大言語であるハウサ語では/n/が一人称単数主語代名詞、クペレ語では一人称単数所有代名詞なのである。このように、アフリカの言語では、「子音前鼻音」が語頭に來る事例は普通で、枚挙に暇がない。

アフリカの言語や文化を研究する場合(特にイーミックな立場を重視する人類学のフィールドワークでは)、言語のそうした自然な体系性を出来る限り尊重した記述を心掛けることが、後々の分析的な論述で無理のない論理展開をするための必須の土台となる。だからこそ私は、Ndanaiをソダナイ、或いはンダナイと表記してきたのである。

五、なぜセメンヤは、今でもセメンヤなのか

日本語は、歴史的に、各王朝時代の中国語のみならず、オランダ語やポルトガル語、新しくは英語、独語、仏語、スペイン語、ポルトガル語等の西欧諸言語の影響を受けて、自らを豊かに革新してきた。それにも拘らず、アフリカ語に広く見られる「子音前鼻音」が語頭に來る単語の語頭を「ン」で表現することを、なぜ今も頑に拒み続けているのだろうか。

それらの音は、日本語の「ン」によく近似している。日本人でも、「ン」の音から発音し始めるのは容易だ。「んな馬鹿な」も、「んーん、困ったな」も、日頃ついつい口を突いて出てしまうはずだ。だから、日本語の音韻構造が基本的に開音節であっても、他言語の表記にそれを押しつけて済ますのは筋が違おう。エンクルマ問題の解決も、「語頭のn = ヌ」へと無原則に退行して事足りれとするのでは、日本語を豊かに生きる歴史や精神に反しよう。最後に、その退嬰主義的な姿勢一般が、実はさらに新たな問題を派生させていることに注意を喚起して、小稿を閉じたい。

2009年8月、ベルリンで開催された世界陸上選手権女子800メートル競走で優勝した、南アフリカ人選手Caster Semenya(当時18歳)が一躍世界の視線を集めた。ただし、性別疑惑の対象として。今問いたいのはその事ではない。彼女が日

本語ではセメンヤと表記される事実の方である。

アフリカ人なら、誰一人彼女をセメンヤとは呼ばず、セメニヤと呼ぶ——いわば、Kenyaがケニアであって、ケンヤでないと同様に。その事実日本に日本のマスコミが全く無頓着なのは、一体なぜだろう。本年2016年のリオ五輪の同競技の優勝者（セメニヤその人）の名前も、セメンヤのままだった。エンクルマにしてしまったからエンクルマで押し通すというのとそっくり同じ無神経と尊大不遜な（無）論理を感じずにはおれない。

おわりに

「日本語にない『ン』をどうすればいいのだろう」と、今も真摯に自問し続ける奥野。彼はその昔、はるばるガーナまで自ら出掛けて行き、Nkrumaがエンクルでないことを知って激しい衝撃を覚えて以来、自責の念に苛まれてきたのだ。その彼の姿に接して、謙虚で高貴な精神を感じた。

西野照太郎は、結果的に選択を大きく誤ったかも知れない。でも、彼は文献や映像資料を精査して、Nkrumaの「n」がどう発音されるのか突き詰めて知ろうと務めたはずだ。エンクルマをソクルマ（かクルマ）の表記に改めれば済むことなのだが、それはもう既に我々自身の問題だ。

今やSemenyaの発音を知ろうと、延々南ア迄出向く必要などもう何処にもない。インターネットなら、ものの数分できれいに方が付く。ほんのちょっとした当然の心遣いが、しかも（望むらくは）最初の機会にできたなら、この類の全ての事態が劇的に改善されるのだ。「縁は異なるもの」と言うではないか。それを忘れ、（恐らく日本語の「分節法」を無自覚な根拠として）無神経にもセメンヤと決めつけて少しも疑わないのなら、それは知に対するメディア側の冒瀆にも当るだろう。

セメニヤを何よりも苦しめ続けているのは、五輪のもつ「性二元的」文化の無反省な押しつけである。まさしく、これもまた文化に特有の「分節」の暴力と言ってよい。しかし、名前の読み方の分節の勝手気儘な押しつけは、その暴力にも強ち劣らないかも知れない。

書くとは、常に何かを意味付けることである。「ペンが剣よりも強し」が最も真実味を帯びるのは、皮肉にも、そのペンを普通の人々に向けて相手を無遠慮に切り刻む（分節する）時なのである。

〔追記〕近年新聞各紙は、鼻音で始まるアフリカ人名を「ヌー」と表記することがむしろ多くなっているようだ。これが一種の思考停止的な「先祖返り」の表記であることは、既に述べた通りであり、あらためて詳説する迄もないと思う。



筆者（文化人類学者）のフィールドワークの拠点、
ンダナイ（ケニア）の下宿—土間の書斎兼寝室

『良友』画報と上海の文学研究

孫 安石／山口 建治／村井 寛志／大里 浩秋 (名誉教授)

『良友』画報を取り上げた本研究は2015年から3年間にわたり学内共同研究(『良友』画報と東アジアの都市文化に関する共同研究)に採択され、今まで活動記録をすべて掘り起こし研究会のブログ <http://liangyou.jugem.jp/> に内容を一般公開している。以下、2016年1月以降の活動記録を記す。

(1) 第56回『良友』画報研究会

日時：2016年2月19日(金曜日)

場所：神戸学院大学ポートアイランドキャンパス
D号館3階 アクティブ・スタジオ

報告：

- (一)「North China Heraldと日本人」藤田拓之
- (二)「『上海日日新聞』について」竹松良明
- (三)「North China Heraldと『良友』画報」孫安石

コメンテーター：菊池敏夫、中村みどり、村井寛志、森平崇文、呉孟晋、石川照子

(2) 第57回『良友』画報研究会—国際シンポジウム「上海租界と行政(一)」

主催：神奈川大学・『良友』画報研究会

日時：2016年6月23日

場所：神奈川大学横浜キャンパス1号館308室
司会：中村みどり(神奈川大学)

- (一)「上海市社会局の研究」李鎧光(台湾、中央研究院研究助手)
- (二)「上海市社会局と『風紀』問題」菊池敏夫(神

奈川大学)

(三)「上海租界の納税人会議と中国人参事」王敏(上海社会科学院)

(四)「『上海市政概要1934』を読む」孫安石(神奈川大学)

(五)「中支那振興株式会社の研究と課題」高綱博文(日本大学)、

コメンテーター：石川照子(大妻女子大学)、村井寛志(神奈川大学)

(3) 第58回『良友』画報研究会—国際シンポジウム「上海と『良友』画報の世界」

日時：2016年10月22日(土曜日)10時-5時

場所：神奈川大学横浜キャンパス・3号館307室
司会：孫安石(神奈川大学)

第一部

(一)「『良友』にみる食文化について」岩間一弘(慶應義塾大学)

(二)「『良友』画報と文学」中村みどり(神奈川大学)

(三)「『良友』画報と日本表象—『日本人生活』を手がかりとして」石川照子(大妻女子大学)

コメンテーター：孫慧敏(台湾中央研究院)、林美莉(台湾中央研究院)、陳祖恩(上海市社会科学院)

第二部

(一)「『良友』画報とポスター」田島奈都子(青梅市立美術館)

(二)『『良友』画報と漫画』城山拓也(立命館大学)

(三)「上海小報議《良友》」林美莉(台湾、中央研究院)

(四)「『誰讀《良友》?』孫慧敏(台湾、中央研究院)

(五)『『良友』画報和大上海都市計画』陳祖恩(東華大学)

コメンテーター：菊池敏夫(神奈川大学)、村井寛志(神奈川大学)、森平崇文(神戸学院大学)



スペイン語を専攻する学生のための教材研究

Arturo Varón / Víctor Calderón / 高垣敏博 / 片岡喜代子 / 菊田和佳子

本研究グループは、スペイン語を専攻する学生に向けた教材の研究を目的として、2014年度から活動を行っている。本研究グループのメンバーが所属するスペイン語学科のカリキュラムは、スペイン語を専攻言語とし、その語学力を生かして、スペイン語圏の言語・文化・歴史・社会に関する専門的知識を修得することを目標としている。そのためには、専門分野の研究をするのに十分なスペイン語の知識を1-2年次の内に学生に身につけさせる必要がある。スペイン語学科では、効果的な学習のために、1-2年次には会話を中心とするネイティブ教員の授業を週2コマ、文法を中心とする日本人教員の授業を週3コマ開講(必修科目)し、それぞれのクラスの担当者が互いに連携を取りながら授業を進める体制をとっている。また科目によって違いはあるが、少人数制や習熟度別のクラス編成も実施し、学習しやすい環境づくりに努めている。

しかし、教材に関していえば、本学科のようにスペイン語を専攻語とする学科ならではのプログラムに合ったものはほとんど市販されていないのが現状である。また、体系的に言語を学ぶ文法の

教材と言語運用を重視する会話の教材の性質は当然異なるため、それぞれの授業で用いられる教材の文法配列や語彙などは一致していないことも多い。その結果、学習事項が一気に増える1年次の後期あたりから学生の間でも混乱が見られるようになり、これが学習意欲低下の一因ともなっている。

本研究は、こうした諸問題を解決するため、教材開発の段階から日本人教員とネイティブ教員が連携をとり、学習事項の提示順や語彙、話題の選択などを工夫することによって、効率よく学習効果を上げることができ教材を開発することを目指している。2016年度は、文法を中心にこれまでの教材の問題点の洗い出しと本学科の学生のレベルや関心にあった内容の検討を行った。今後は、ネイティブ教員(代表：バロン)が準備を進めているテキストとの調整を行い、採用すべき文法事項の配列や語彙について検討する予定である。言語センターからの助成を受け、2017年度にパイロット版を完成すべく、教科書作成担当者(代表：高垣)を中心に新しい文法教材の執筆を進めている。

レアリア学習からみた外国語学習語彙の研究

堤 正典

これまで、外国語使用における現実知識であるレアリアの教育そのものについて研究を行ってきた。その成果のひとつとして、学習語彙のリストを見直すことが新たな課題となることがわかった。

ロシア語の場合、学習に必要な語彙とされるものにレアリアから見ると必要な語彙が含まれていないことがある。ロシア連邦教育科学省認定のロシア語検定試験ТРКИはそれぞれのレベルに必要な学習語彙が挙げられていて、日本人へのロシア語教育においても大いに参考になる。しかし、それは留学生向けのものであり、そのロシア語は、ロシアで生活し、ロシアの大学で勉強することを前提としており、学習語彙もそのようなものとなっている。日本人学習者がロシア語を使用する場面はそればかりではない。留学という場面とともに、ビジネスや観光もあるし、それに並んで日本を訪れたロシア人への対応もある。

このような種々の場面で用いられるロシア語を洗い出し、そこでの語彙で従来の学習語彙にない

ものを学習内容に盛り込むかどうか検討を行う必要がある。この観点から現在検討を続けている。

また、検討の過程で、以下のようなこともわかってきた。日本語では区別がないが、ロシア語のТРКИの学習語彙（第1レベル）では異なる語を用いるような場合、日本人ロシア語学習者には使い分けが困難である。そのような場合には使い分けをしないで用いることができる語を学習語彙に追加するとよい。例えば、ロシア語では「行く」について「歩いて行く」と「乗り物で行く」を区別しなければならず、道を尋ねる際にも（「～へはどう行けばよいですか」）その使い分けが必要である。しかし、道を尋ねる場合は徒歩と乗り物の区別をしなくてよい語を使うことができるが、その語は第1レベルのТРКИ学習語彙に含まれず、その他の基礎的学習書でもその語が導入されることはほとんどない。このような語は日本人向け学習語彙に取り込むべきである。

新たな観点も含め、検討を続けていく。

言語景観の応用言語学的実証研究

彭 国躍／尹 亭仁

今年度の研究グループ活動は、主に言語景観の通時的変化と共時的現状の両面においてデータの収集を進めている。通時的研究は主に中国におけ

る歴史的都市言語景観、共時的研究は主に日本国内の多言語使用景観のデータ収集と分析に力を入れている。

彭が担当する歴史的、通時的研究の成果は一部「百年前の上海租界の言語景観」を題として2016年9月23日の非文字資料研究センターの研究会で口頭発表した。そして、『年報 非文字資料研究(14号)』に「上海南京路上言語景観的百年変遷(補正)―歴史社会言語学個案研究」が掲載され、非文字資料研究センターの「ニューズレター(37号)」において「言語景観研究の可能性について―ことばと社会のインターフェイス」という題でデータ分析の一部が掲載されることとなった。

2016年11月現在、訪日外国人観光客(インバウンド)の数は2千万人を超えている。インバウンドの内訳を見ると、中国、韓国、台湾、香港からの人が7割以上を占めている。この傾向を反映しているかのように、空港や全国のJRの駅など、日本の交通機関の案内表示は「日本語・英語・中国語・韓国語」が一つのパターンとなっている。

尹は、日本における韓国語の言語景観の様相および交通機関から商業施設などへの広がり確かめるべく、横浜の駅周辺および商業施設の高島屋、そごう、ヨドバシカメラと観光地である鎌倉駅などで景観調査を行なった。

さらに、韓国語初級および中級の履修学生約100人に各自の最寄り駅における言語景観を調べさせた。学生から報告された200枚以上の駅の写真に韓国語の表記が見られたが、路線によっては表記法が異なっているなど、新たな問題点が浮き彫りになった。日本語の語頭にくる子音4つ(k, t, p, ch)をハングルでどう表記するかは、韓国語教育において問題となっている。例えば、「鎌倉」を「카마쿠라」に表記するか「가마쿠라」に表記するかの問題である。韓国語において有気音の「k」と無気音の「k」は日本語と違って弁別的素

性である。これに加わって、「新宿3丁目」も「신주쿠산초메」と「신주쿠산초메」の2つの表記が見られた。日本における韓国語の景観の調査範囲を広げつつ、表記法の統一や言語景観を韓国語教育に生かす方法などについては論文にまとめる予定である。



横浜駅 中央通路



横浜ヨドバシカメラ



横浜高島屋・ITO-YA

新漢語水平考試作文問題の中国語教育への応用

加藤 宏紀

新HSKの過去問題や関連の問題集から、主要な文型や文法項目を整理し、4級と5級の各級における各種の難易度の観点から出題の傾向について分析を進めている。4級と5級のいずれでも出題頻度の高い文型である処置式(“把”字文)を例に説明する。

まず、並べ替える語数により、4級では、6語、7～8語、9～11語の3段階で区分があり、5級では、6～7語、8～9語の2段階で区分がある。次の(1)は4級の8語並べ替え、(2)は4級の11語並べ替え、(3)は5級の7語並べ替えである。

(1) 你 请 把 这张 打印 调查表 一下
马上

(2) 自己的 标准 谁 也 把 经验 作为
判断 的 对错 不能

(3) 孩子 碎 把 镜子 摔 了 妈妈的

次に、各問題の関連文法事項を挙げる。(1)は(a)処置式の述語形式(V+“一下”)、(b)依頼の兼語文“请你…”、(c)量詞“张”の用法、(d)副詞

“马上”の位置の4項目である。(2)は(a)処置式の常用述語“作为”、(b)疑問詞+“也不”の全称表現、(c)助動詞“(不)能”の位置、(d)限定修飾成分の動詞句(“判断对错的”)の4項目である。(3)は(a)処置式の常用の述語形式になる動詞結果補語構造“摔碎”、(b)アスペクト助詞“了”の位置の2項目である。

最後に、(1)-(3)で使用された語彙の難易度は次のとおりである。

1級: 你, 请, 的, 谁, 不, 能, 了, 妈妈

2級: 张, 也, 对 (错), (对) 错, 孩子

3級: 把, 这, 马上, 自己,

4級: 调查 (表), 标准, 经验, 判断, 镜子

5級: 打印, 作为, 碎, 摔

6級: なし

等級区分なし: (调查) 表, 一下

今後は、このような分析を進めると同時に、実際の解答事例を基礎データとした誤答と照らし合わせながら、教育内容の改善に向けた考察を行う。



日本語・韓国語教育における漢語動詞の研究

高木南欧子／尹 亭仁

本研究は、漢語の中でも特に漢語動詞に焦点をあて、日本語・韓国語両言語の語学教材における現状を調査し、母語干渉について考察を行う。最終的には、この結果を日本語教育・韓国語教育の現場へ還元することを目的としている。

2016年度は、前年度に収集したテキストから

漢語を抽出し、提出順序、例文、指導書の記述の整理作業を進めている。教育現場での利用を念頭においていることから、頻度・重要度を見るため、日本語では『日本語能力試験出題基準』(旧日本語能力試験に対応した基準)を参照、分類を行っている。『日本語能力試験出題基準』に1級、2

級とも共通して分類されているものは、頻度・重要度が高いと判断する。韓国語においては、等級別に語彙が分類されている『등급별 국어교육용 어휘』(等級別国語教育用語彙)を用いてレベル別の分類を行っている。双方のリストを照合し、一方のリストにはあるが一方のリストにないもの

を抽出し、頻度・提出順序、例文などから、教育現場で指導すべき語彙リストを作成する。本研究の成果は、将来的に、教員が指導上注意すべき課題として認識するための利用と、学習者自身が参考とするための利用を目指す予定である。

音響機器等を利用した音声教材の試作

小松 雅彦／松村 文芳

研究代表者の小松が在外研究のため、松村が中心となって報告する。松村は中国語学科の学生に開講している「中国語演習Ⅱc (リスニング)」を5年間担当している。北京語言大学出版社の『初級漢語聴力2』を使用してテキスト付属の音声waveファイルに変換して、言語研究センターのAdiLL-1000のシステムで学生に学習させている。学生はヘッドホーンで音声を聞いてすぐに問題に回答するので授業時間が有効に使える。リスニングといっても意味がむずかしいので意味説明に時間がかかるのが難点である。最近このシステムで流れるきれいな音声と文の意味の関連を明示すれば学習者はより効率的に中国語を習得できるのではないかと考えるようになった。そこで市販されている音声処理ソフトを使用して教材中のいくつかの文をとりこみ、波形の分析を行った。その結果、前置詞の「把」、「連」、「被」等の波形の振幅が大きいに気づいた。前置詞はその直後に来る名詞句に比して振幅が小さいと思っていたが、結果は予想を裏切った。そこでこれらの文の意味を考え、それを論理式で表記してみると、それらの前置詞は論理式の最も外側の関数(述語)になる、つまり母型文の述語になっていることが明らかになった。今後はこれらの前置詞の発音に注目

して教える必要があることを認識した。また波形では振幅の小さい弱い音節も意味上は重要な役割をしているので、音声と意味のつながりは今後多面的な視点が欠かせないことが明らかになっている。小松の在外研究の終了を待って英語音声研究とのすりあわせを検討したい。

小松は、英語のリスニングやディクテーションの教材として使用できそうなものとして、幼児向けアニメのDVDを検討している。リーディング学習では、精読に対して辞書を引かずにどんどん読む多読という方法が提唱されているが、リスニングの場合は、リアルタイムで音声が出てきてしまうので、そもそも辞書を使わずに速く理解するしかない。その点、幼児向けアニメは、内容が分かり易く、知らない単語があっても映像を見れば意味が分かる。上の年齢の子供向けのものと比べて、発音もはっきりしているように感じられる。また、最近公開された調音や発声の動画教材についての調査検討を行っている。いずれも、体の外からは直接見ることのできない器官の映像を体系的に編集したものであり、貴重な映像を多く含んでいる。これらの授業内での活用方法を検討している。

『良友』画報と上海の文学研究

孫 安石／山口 建治／村井 寛志／大里 浩秋 (名誉教授)

共同研究の詳細については、2015年度に開設したブログ <http://liangyou.jugem.jp/> に関連記録を公開しています。

成果一覧 (論文・口頭発表等)

孫 安石 『『良友』画報関連の台湾調査報告』(口頭報告、2015年9月2日)

孫 安石 「North China Heraldと『良友』画報」(口頭報告、2016年2月19日)

孫 安石 Liangyou: Kaleidoscopic Modernity and

the Shanghai Global Metropolis, 1926-1945の書評 (口頭報告、2015年12月4日)

村井寛志 「第52回『良友』画報研究会」のコメントーター

村井寛志 「第56回『良友』画報研究会」のコメントーター

大里浩秋村井寛志 「第52回『良友』画報研究会」のコメントーター



節周辺部の構造、素性の普遍性と個別性

佐藤 裕美／辻子美保子／片岡喜代子／加藤 宏紀／相原 昌彦

テンス、アスペクト、モダリティ、文タイプなどに関わる節周辺部の構造、それぞれに関わる機能範疇の語彙的特性や言語間、同一言語内における多様性のパターンについて、英語、日本語、中国語、スペイン語、イタリア語などに観察される現象を考察し、節構造と関わる普遍的性質、個別言語的特徴について説明することを目的とし、研究会での成果を、片岡喜代子、加藤宏紀(編) 神奈川大学言語学研究叢書6『言語の意味論的二元性と統辞論』(ひつじ書房)として出版することができた。本書では統辞論から語用論へのインターフェイスに関わる節周辺部が個別言語の多様性を最も顕著に表し、個々の言語に可能な構造における変異や語彙の相違など、相違の範囲の可能性をも説明するものであると考え、述語一項関係に基づく文の論理的意味を与えてくれる構造であ

るvP相のみならず、vP相以降の節周辺部で構造化する文タイプを決定するなどの機能をもつ要素にも着目し、それらに関わる現象について議論した。

成果一覧 (論文・口頭発表等)

辻子美保子 「格付値と格素性の役割」

片岡喜代子 「否定関連現象から見た言語間変異—否定作用域と否定述部」

加藤 宏紀 「“ZHE”の意味と統語的位置—SC理論の観点から」

佐藤 裕美 「英語不定詞のテンス、アスペクトと構造」

相原 昌彦 「日本語否定疑問文からみる疑問文の統語構造と意味」

無声ビデオを用いたナレーションによる 英語プレゼンテーション、ツアーガイド演習に関するケーススタディ

ソリス・メイビクトリア セリノ／佐藤 裕美

英語スピーキングとプレゼンテーションの演習のためのビデオを用いた教材作成とそれを使用した学生の英語スピーキング力の向上に関してのケーススタディを実施することを目標とした。本年度は教材作成に多くの時間を費やしたが、完成にはいたらなかった。しかし、サンプルを実際の授業で使用し、完全点などを検討することができ

た。また、ケーススタディの実施の詳細を検討し、無声ビデオの作成撮影、編集とビデオに関連したリーディング資料、学習者に配布する資料等の執筆を行った。教材テキストとビデオの完成に向け、作業を継続中であり、その後本格的なケーススタディを行う予定である。



新漢語水平考試 5 級問題を利用した 中国語自動学習システムの開発

加藤 宏紀／彭 国躍／松村 文芳

1. 本研究は、中国語自動学習室内の閉じられたネットワーク上で、新HSK5級を利用した中国語自動学習態勢を構築することを目的としている。
2. 本研究では、まず既存のネットワーク上での自動学習を可能にするため、新HSK問題のデータ化を進めた。
3. データ化に当たっては、モデル構築の観点から、新HSK5級の問題集を参考に、「聴力」、「閲読」、「作文」の3分野のそれぞれ第一部分に焦点をあてた。
4. 本システムでは、問題を解いて、可否を確認するという単純な電子版問題集ではなく、各設問のポイント解説を
5. ポイント解説の整理を通して、各分野の学習ポイントは次のようにまとめられる。
 - (1) 聴力：1対の対話から、質問、紹介、もてなし、交際・交流など日常的な口頭語のコミュニケーション場面における知識・能力をテストする。具体的には、心情や態度などの語気、人間関係、場所、話題、身分および慣用語の

意味などを対話から聴き取る設問が用意されている。

- (2) 閲読：実詞と虚詞それぞれについて、語彙・表現の識別能力を判定する。それぞれの
 - (2-1) 実詞の識別能力
 - (a) 組み合わせ対象の違い；(b) 語の機能の違い；(c) 使用範囲の違い
 - (2-2) 虚詞の識別能力
 - (a) 基本的な虚詞の用法の熟知、把握；(b) 用法の類似した虚詞の違いの熟知、把握；(c) 複文における接続表現の正確な運用
- (3) 作文：基本文型の理解、付加的修飾的成分の種類と語順の理解、複文への適応能力について判定する。
 - (3-1) 基本文型の理解
 - (a) 名詞述語文；(b) 形容詞述語文；(c) 主述述語文；(d) 連動文；(e) 兼語文；(f) 比較文；(g) 処置文；(h) 受身文
 - (3-2) 付加的修飾的成分の種類と語順の理解
 - (a) 連体修飾語；(b) 連用修飾語；(c) 動量補語；(d) 時量補語；(e) 方向補語；(f) 状態

補語; (g)結果補語;
(3-3) 複文における接続表現の正確な運用
(a)前後の節の主語の同一性と接続詞の位置; (b)後節の接続詞の位置; (c)共起す

る副詞の位置
6. 本システムをモデルとして構築したことにより、より内容の濃い解説の追加や他の級のバージョンへの転用といった波及効果を期待できる。



外国語学習・教育における レアリアの具体的教育内容に関する研究

堤 正典／西野 清治

2014年度にはロシア語の初修レベルでのレアリアの学習内容について検討を続けた。特に、学習語彙との関係に注意を払うべきであることが分かった。

また、2014年7月13日に、神奈川大学国際交流事業として、ロシアからも研究者を招き、国内の研究者の参加も得て「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア語と日本語』」を開催した。言語教育におけるレアリアについての諸相について報告・討論があったが、特にこのシンポジウムによって、日ロ両言語で、一方で基本的な語彙が用いられる表現が他方ではより高いレベルで学習する語彙によってのみ表わされていることが多々あり、このような言い回しや発想の違いはレアリアの知識に関わることに改めて注目させられた。

2015年度も初修レベルの語彙についてレアリア学習の面から検討を続けた。学習語彙においては、ロシア文化に特有なものや、日本人学習者にわかりにくいものなどの語はそれなりの説明を付け加えなければならない。説明を加えなければならないのは、それなりの負担ではあるが、そのような語を適切に含めることはロシア語に慣れさせるのに必要であることが認識された。

なお、堤はかつての共同研究者である非常勤講師の小林潔氏と共同で、スペイン・グラナダで開催された国際ロシア語・ロシア文学教師連盟大会（四年に一度開催）で「ロシア語を学習していない学生に対するロシア文化教育」をテーマに報告

を行い、ロシア連邦の国立ブリヤート大学の創立20周年記念論文集には「ロシア事情講義の様々な教授形態」について投稿した。これらの研究は、外国語学習におけるレアリア知識というよりも、ロシア文化を直接教育することを取り上げたわけだが、学習者に異文化について教育することでは共通する。この成果は別の角度から本研究と関わるものである。

成果一覧（論文・口頭発表等）

「外国語教育とレアリア」堤正典『ロシア語学と言語教育Ⅴ』（堤正典編、神奈川大学言語研究センター）pp.5-10, 2015.

«Преподавание русской культуры японским студентам, не изучающим русский язык»（ロシア語を学習していない日本人学生に対するロシア文化の教育）、小林潔・堤正典 // *Русский язык и литература в пространстве мировой культуры: Материалы XIII Конгресса МАПРЯЛ*（Вербицкая Л. А., Рогова К.А. Попова Т.И. 編 СПб. : МАПРЯЛ）10th vol., pp.483-487, 2015.

«Роль различных методических форм в курсе «Страноведение России»（из опыта одного японского университета）»（「ロシア事情」講義における種々の教授形態の役割）堤正典・小林潔 // *ЕВРАЗИЙСКАЯ ПАРАДИГМА РОССИИ: ЦЕННОСТИ, ИДЕИ, ПРАКТИКА*（Удан-Улэ: Издательство БГУ）pp.96-98, 2016.

【 新入所員紹介 】

英語英文学科 ^{かみ}上 ^{ひであき}英明 助教

専門は国際関係史で、アメリカ研究と中南米研究とを橋渡しすることを目指しております。とくにこれまで関心を寄せてきたのが、米・キューバ関係でした。アメリカ合衆国とキューバは2015年に国交回復しますが、そもそもなぜ半世紀もの長きに渡って対立しているのかを疑問に感じ、それを解くために様々な場所で史料調査を重ねております。その過程で、資本主義と共産主義という「東西対立」や、西半球における大国の覇権政策とカリブ海の小国が起こした革命運動とが衝突する「南北問題」を学びました。また、キューバ革命に反発する反革命勢力が合衆国の政治に参加したことに着目し、「移民と外交」がどのように交錯するのか、という新しいテーマにも取り組んでおります。今後については、キューバを含め中南米から流入する多くの移民たちが、合衆国の社会をどう変えていくのか、といったテーマにも挑戦したいです。したがって、合衆国におけるバイリンガル教育や英語単一運動をめぐる議論にも興味を寄せております。新しい動きを見ながら、研究を進めていければと思います。

中国語学科 ^か夏 ^{かいえん}海燕 助教

今まで主に認知意味論の立場から語彙の意味変化・文法化における規則性や予測可能性の研究に取り組んできた。主として「着点動作主動詞 (Goal-Agent Verbs)」（他動詞でありながら動作が動作主から出発し動作主において終結するという他動詞の典型から外れた特徴を持つ動詞）、および意味的に関連のある動詞類の意味拡張を取り上げ、研究を行った。そのうち、中国語においては、一部の着点動作主動詞が意味拡張にとどまらず、受身標識へと文法化するという意味変化の方向性が見られる。中国語動詞由来受身標識について今まで個別に扱う研究が多い中で、着点動作主動詞という新たな視点から統一的に説明を与えるとともに、その類型論的な位置づけも明らかにした。

意味論の研究とともに、共同研究者として基盤研究 (B)「移動表現による言語類型論：実験的統一課題による通言語的研究」に関っており、中国語をはじめ、移動表現、特にダイクシス（直示表現）の研究に力を入れている。ビデオ実験を行い、今まで言われてきた「話者領域」が「視覚性」と結びついていること、「視覚性」と「方向性」の競合、さらにその度合いが言語によって異なることを検証している。

『言語の意味論的二元性と統辞論』 刊行にあたって

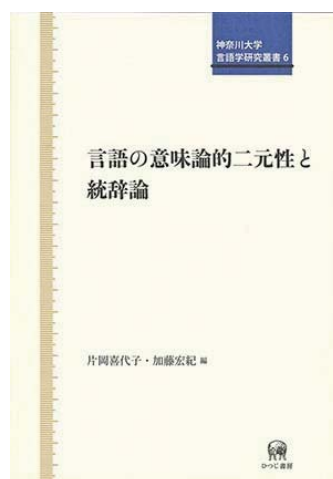
編者代表 外国語学部 片岡喜代子

本書は、神奈川大学言語研究センター共同研究グループ「節周辺部の構造、素性の普遍性と個別性」(2013-2015年度代表:佐藤裕美)のこの3年間にわたる研究成果をまとめたものである。当グループは、言語の普遍性解明を目指す言語理論のもと各個別言語の相違を追求するという目的で、16年前に神奈川大学言語研究センター内に立ち上げた「対照言語学研究会」を母体として研究活動を続けてきた。まさに言語研究センターとともに歩んできた研究である。

言語表現の一つの単位である文は、その核をなす命題と、その命題の周辺要素から成る。時制やアスペクト、作用域、様相等に関わるのが、周辺要素であり、各個別言語の特徴が現れ多様性が最も顕著に確認される部分でもある。その周辺要素が、命題構成要素と如何に関わり、その働きが命題が成す節構造に如何に反映されるかを探り、更には文レベルで与えられた構造と意味が、文脈における発話として如何に働くかも視野に入れた研究を行ってきた。

その研究そのものに終わりはないが、現時点での成果をまとめるべく本書では、時制やアスペクト、格素性の付値、数量詞解釈、否定現象から見た周辺部構造のあり方、そして疑問を含む文末助詞による命題態度表明などを、日本語・英語・中国語・スペイン語を材料に論じている。執筆は本

学で教育に携わってきた相原昌彦、片岡喜代子、加藤宏紀、佐藤裕美、辻子美保子、武内道子と上田由紀子(執筆時秋田大学、現山口大学)による。それぞれに教育・学内業務の合間を縫っての研究活動であり、時間のやり繰りが困難を極める中で研究会を行い、論文を完成させた。今回の成果をもとに、更に議論が深まり研究を発展させていくことを各メンバー望んでいる。常に暖かいご支援と成果を発表する機会を与えて下さった言語研究センターには感謝の気持ちで一杯である。今後も、「言語学」という、成果が形に出るのに時間がかかる分野を支えて下さることを切に願っている。



神奈川大学言語学研究叢書 6
2016年 ひつじ書房